

王室ファッション裏話

…服飾史家・中野香織…

③



「チャールズ2世」 トーマス・ホーカーに帰属 1680年ごろ

油彩／カンヴァス ロンドン・ナショナル・ポर्टレートギャラリー蔵

©National Portrait Gallery, London

ヒールで脚線美を競う

ロングヘアと脚線美は、当時の男らしさの象徴である。高めのヒールの靴でふくらはぎの曲線を強調し、ガーター勲章で美の仕上げをしたうえで、どうだとはかり太ももまでラインを誇示している。ライバル視していた隣国フランスの国王ルイ十四世も、肖像画では赤いヒールの靴をはいて同じように脚を誇る。

愛人を多数もつ艶福家でおしゃれでもあったチャールズ二世だが、ペスト、ロンドン大火などの国難に見舞われた。厄災続きは宮廷の放蕩のせいだという世間の声を鎮めるために、チャールズ二世が宮廷改革として行ったのは、衣服改革だった。ここで「今後、変えることはない」と宣言された「簡素な」男性服のシステムが、現在のスリーピーススーツの起源となる。三百五十年経って、いまなお、その宣言は有効である。